
天体観測

藤森優斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天体観測

【Nコード】

N4678D

【作者名】

藤森優斗

【あらすじ】

「本当に行っちゃうの?」「うん。もう決まっちゃった事なんだって」「くすつ…ああ……」「紗弥夏、そんなに泣かないでよ。僕、いつかまた帰ってくるから」「本当に?」「うん!本当に」「約束だよ!」「分かった。約束」三人、小指が三本、結んで泣き崩れた。星が輝く夜の駅で三人分の約束が結ばれ、僕は離れていった。「じやあね…」二人の女の子は下を向いてただ泣き続けた。そんなに泣かないで。心の中で二人に呼び掛けた。自分だって泣いているくせに。また会おう。この場所で。この、今日という流れ星を追いか

٧

一等星 再会の日

一等星

久し振りの感覚だ。この涼しい風も、木が日陰をつくってくれる事も。

ここ「天川村」はとことん田舎だ。建物も破棄されたボロボロの物しかない。建物と言ってもビルと言うには遠い物でどちらかと言うと3階建の家って感じた。

まあこの田舎の中では大きい建物なのだけど。十年間経っても何一つ変わらなく自然が豊かで、今騒がれている地球温暖化や自然破壊を微塵も感じさせない穏やかな村。

この日本中何処を探してもここまで電信柱が少ない所はあまり無いと思う。ここに電気は来ているのか？って思うほどの近代化されていない村。

実際、この村でテレビがある家は十件に一件というくらいで、パソコンに関しては十人に一人が知っているかどうかだ。今日日本がどんな状況に置かれているか伝わりそうもない村だ。

他国と考えても良いほど。

でも一つ言える事がある。俺が何故この村が好きで、何故この村に帰ってきたか。

それは会わなくてはいけない奴等が居るって事と、俺が知っている範囲ではこの村で見る星空が一番綺麗だからって事。それがあればテレビやパソコンなんて無くても良い。俺はそう思う。

「佑輔、荷物運ぶの手伝ってくれ」親父に呼ばれた。

「ああ、分かったよ」

俺は今日、この天川村に引っ越してきた。

引っ越してきたと言っても産まれたのはこの村の隣の病院だし、住んでいたのはこの村だ。

だからその時住んでいた家は今も健在で今日からまたそこに住む事になった。

昔、俺が五歳の頃は経済的に親父がピンチだったらしく、もっと仕事を増やす為に東京に引っ越した。

それから十年。親父の仕事も成功を収め、この村に帰ってきた。それのお供をした俺は東京に慣れてしまったため、この村は公園よりも何もなく見える。

まあ初めから分かっていた事だけだね。

補足すると母親は居ない。俺が産まれた時に死んだらしい。だから見た事もない。

親父が家事得意だし生活は充実しているから別に良いけど。

そんなこんなで荷物も全部入れ終わり引っ越し作業は無事終わった。俺の部屋は二階。ベランダに繋がっている。そのベランダがなかなか広くて俺はそこに天体望遠鏡を置いた。

東京と違いここは星がよく見える。俺にとっては最高の場所だ。部屋にはあと、テレビとパソコン。どっちも東京で買ったものだ。

この村の人達に見られたらパンダ来日してくらいに騒がれるだろうから隠しておこう。

「はあ… 久し振りに動いて疲れたな…」

そんな独り言が響くほどこの村は静かだ。おっと、そう言えば一時にあいつらが来るって言うてたっけな。って後十分で一時じゃないか！急がねば…

ピンポン

「おう！ 紗弥夏ちゃんに加奈ちゃん、久し振りだねえ！」

「叔父さん、お久し振りです！」

「全く、二人とも綺麗になっちゃって」…それから淡々と笑い声が下から聞こえてくる。

親父は言葉のセクハラ行為を繰り返し、懐かしい二人の女の子に話し掛けていた。家に着いてから二十分。やっと階段を上がる音が聞こえた。どうやら長期に及ぶ言語式セクハラ行為は終わったらしく

い。

ガラガラッ…あの某有名猫型ロボットアニメの部屋に似ている俺の部屋のドアを開ける音がした。

「久しぶり、佑くん！いやぁ〜大きくなったね！」

二人の内、テンションが高い方の女の子が大きな声で言った。

「声がでけえよ」

このテンションが高い女の子は月宮紗弥夏。幼馴染みの一人だ。

「もう、紗弥夏！声が大きいよ！その老人の鼓膜が破れちゃうよ！」

そしてもう一人。良い子のようにだけど素直に口の聞き方が悪い方が幼馴染みの星崎加奈。

こいつらが俺が会わなくてはいけない奴等だ。俺等も今年で高校生。同じ学校に通う事になっている。

もちろん学校はこの村にある訳がなく、隣町にある。この村の子供は俺達を混ぜて十人くらいだろうと俺は推測している。

まあ子供会とか無いから心配する事はないけど。

「それにしてもお前ら成長したな」

「同い年に言われたくないんだけどなあ〜」

「本当だよ。佑輔だつてちよつと前までただのガキだったじゃない」

「加奈、お前が思うちよつと前つて一体いつの事だ？十年間会っていないんだぞ。ガキだなんて言っくんじゃねえよ」

そう。俺達は会わずに過ぎた十年間で変わった。本当にガキだった頃から成長した。それでも会話は昔と変わらないな。

「じゃあ、とりあえず村を周りますか？」紗弥夏が言った。

「佑輔が道に迷ったら困るからね」おい、加奈。俺はこんな何も無い村で迷子になる程方向音痴じゃないぞ。故郷で迷うかよ。

「少し変わっちゃった場所とかあるからねえ」紗弥夏が言う。

と言うかさつきから真面目な話は紗弥夏しか言っていないような気がする。加奈は悪口しか言っていない気がするな。

俺達は外に出た。何処を歩いても知っている道だ。

でも懐かしい。何もない道、ただ木が何本か立っているだけ。此処は時代に取り残されたように水車まである。空気が美味しい。技術的な短所から自然的な長所まで今の時代に乗り遅れている。

変わった場所って一体何処なんだ？

「まずは此処！」紗弥夏は元気良く言った。

「此処は昔空き地だったけど今は公園が出来たの」説明は加奈。しばらく会わないうちにこいつらはコンビネーションというものを知ったらしい。

その公園とやらにはブランコが二人分、ベンチが一つだけだった。公園と言えるのだろうか。

それからまた少し歩くと、「次は此処！」とまた紗弥夏が言った。此処って？ただ木が立っているだけの林じゃないか。何が変わったと言うのだ。

「此処の木が五本くらい伐採されたの」……それだけか？それくらいの変化も変わったと紹介しなくてはいけないほど、この村は変わっていないのか？

「おい、もう少し大きな変化があった場所を紹介してくれよ」

「うるさいわねえ！」

昔からだけど加奈は本当に口の聞き方が悪い。ツンデレって事で考えれば良いのだろうか。

「次が最後ね！」

それからまた少し歩いた。此処の村は東京ドームより少し広いくらい面積だ。デイズニールランドよりは狭い。だから歩いても特に疲れはない。それにしても変わらないなあ。

良くこんな所にずっと居たなあ。見渡す限り自然だ。木、木、木、木！民家も作りが古すぎる。大抵の家は全国で言う貸家と同じだ。俺達は普通の家に住んでいるけど、平凡な一軒家だ。

あと一つ変わった場所というのは何処なのだろう。まあ変わっても俺には関係無いけどな。どうでも良い場所ばかり変わりやがった。もっとこう、この村に学校が出来た！とか、村が街と合併す

る！とか大きな話はないものか。

十年もの間この村は何をしていたのか、とても気になる。

「此処だよ！」紗弥夏がまた元気良く言った。

此処って…此処はこの村で一番大きい三階建と言っても過言ではないビルじゃないか。何か変わったのか、此処が。

「佑くんなら此処の事覚えてるよね？」

一応言っておくけど紗弥夏は俺の事を「佑くん」と呼ぶ。此処のビル？ ああ覚えてるさ。一番の思い出だと俺は思っているからな。此処のビルは俺にとって特別の場所だ。

「此処がどうしたんだよ？」

「佑輔なら落ち込むと思うけど…」一体何が起きたと言うのだ。

「このビルね、来年取り壊すんだって…佑くんの特別な場所なのに…」

来年？ まだまだじゃねえかよ。もう、今すぐ取り壊す！ とかだったら本当に落ち込むけどあと一年ある。まだ此処で思い出が作れそうだ。

「来年かあ。じゃあ今年はしっかり頭に刻まないと」

昔、此処で何があったか、何をしたか。それは俺達三人の最高の思い出だ。

「と言う事で以上、天川村の変わった場所でした！」

「いくら佑輔でも、もう覚えてたよね？」

「加奈、そんなに俺を馬鹿にすると学校行つて痛い目にあうぞ？」

「どうぞ、出来るものならね」

やっぱり口の聞き方が悪いと言うか、かなりの負けず嫌いだ。

時刻は午後五時。こんな小さい村を周るだけでこれ程時間が掛かるか？ いいや、掛からない。周る途中で言い争いになったり、思い出話をしたから時間が掛かったんだ。

空はもう紅く染まっていた。「子供はもう帰りなさい」と言うよ

うに空は紅い。カラスも鳴いている。童話になりそうな自然だ。

「これからどうする、佑くん？」

お帰りになるのではないのか？もう歩いて俺の家の前まで来てるし、女の子は早く帰らないと。まあこの村の住民にストーカーなんて居ないし、ほぼ全員知り合いだ。襲われることはないけどね。

「じゃあ、とりあえず佑輔の部屋に行くとするか」

「うん。そうしよう！」

「おい、待てよ！」

そうして二人は勝手に俺の部屋に入りやがった。

ちなみに俺はと言うと、わざわざ自転車で街に食材を買いに行かされている。

何故俺の家なのにあいつらが入って俺が買い出ししなくちゃならないんだ。しかも買ってこいと言われたものは、ジュースとお菓子だけじゃないか。それくらい我慢してくれ。

ハア、ハア…自転車漕ぐのも疲れるなあ、運動不足か？足が重いように動かない。もう、自分達で行けよな。

「あいつらの、バーカッ！」

二等星 星空のハイブリット

二等星

家に戻ると俺の親父と紗弥夏、加奈が話に花を咲かせて盛り上がっていた。幼馴染みの俺を抜きでかよ……ふざけるなって……

「おっ！ おかえり佑くん。疲れたでしょ？」

「ああ、お前等が変態ジジイと盛り上がっている頃、俺はジュースとお菓子が幾つも入ったビニール袋を持って、夕飯の材料まで買って……」

「ご苦労だね。偉い、偉い。もっと早く帰ってきてらもつと偉かったのに」

「加奈、お前は何様のつもりだ？」

「神様かな」

「えゝ加奈だけずるい！ じゃあ私も神様ね」

もう、何とでも言うてる……全く、俺は何でこんな村に帰ってきたんだか……良いことなんてなにもないじゃないか……

「よしっ！ 材料も揃った事だし、じゃあそろそろ始めようか」

「そうだね。じゃあ紗弥夏はジュースとか用意しといて」

「分かった！」

一体、何を始めようと言うのだ？ 小火騒ぎなら止してくれ。引越し早々大火事なんて嫌だからな。

しばらくすると、リビングのテーブルの上には豪華な料理が続々と並んできた。

「じゃあ始めようか。佑くんおかえりパーティー」

「佑輔、帰郷おめでとう。よくぞ帰ってきたね」

そういう事か。だから親父はさっき「じゃあ、俺は久し振りに婆さん爺さんになっちまった奴等と一騒ぎしてくるかな。じゃあ佑輔、今日は帰らないかもしれないから」と言っていたのか。恐らく、紗

弥夏と加奈の両親と酒飲んで盛り上がっている事だろう。ガキは無視してか？ まあいい。

「とりあえず、ありがとう」

「そんな、佑くんが御礼なんて珍しい」

「きつと、明日は大嵐とハリケーンだね」

「加奈、一言多いぞ」

「まあまあ、じゃあコップ持って」

紗弥夏がそう言うのと、俺と加奈は言い争いを休戦しジュースが入ったコップを持った。

そして

「佑くんの帰郷と幼馴染み三人の再会。私達の友情に……乾杯！」

三人という少人数であるが、テンションを上げ、乾杯した。

俺だつてこいつらに会えて良かったと思っっているからな。

それから数時間後。

大抵の食事も済んでくだらない昔話で盛り上がっていた。

「ねえ佑くん。ちよつと部屋に行こう」

「そうそう。ちよつと用事があるから」

「何だよ、用事って？」

「いいから、いいから」

と二人は言葉を揃えて俺の部屋に向かった。何やら一つ鞆を抱えて。

「もう夜だから大丈夫だね」

「うん」

「何がだよ？」

「じゃーん！ 懐かしいでしょ？」

紗弥夏が鞆から出した物は見覚えのある小さな球体だった。

「懐かしいでしょ！」

それは俺が小さい頃引越す時、紗弥夏にあげた手作りプラネタリウムだった。

「これも」

と加奈が鞆から出した物は、これまた懐かしい。俺が加奈にあげた小さい望遠鏡。丸で双眼鏡のような望遠鏡。この2つがあれば部屋の中でも星が見れる。

昔そう思った俺が作った物だった。

「懐かしいな。まだ持ってたのか」

「当たり前じゃん。佑くんから貰った物なんだから！」

「じゃあ、やろう」加奈が言う。

「そうだね、やろうか」紗弥夏が言う。

そして、二人は言葉を揃えて言った。

「天才観測」

俺は本物の望遠鏡を持っているし、今日は晴れだった。外は空一面星屑の世界だった。でも、俺にも分かっていて。このプラネタリウムと望遠鏡が俺達にとって特別な物という事。

それは俺達にとって本当に特別な物で、引越前日にも三人でこの部屋でやった大切な思い出の物。

「よし！ じゃあ佑くん電気消して」

「ああ」

暗闇になる部屋の中、星座がどうかも分からないような点が天井に広がる。懐かしい。三人で寝つ転がって眺める星空。この空を見て俺は本当に帰ってきた、そう感じた。

これの為に今日家に来たのだろう。これだけは有り難いかな。

翌日、午前6時。

その呼び出し信号が響き、俺は救難信号を出したくなった。

今日は転校初日。昨日二人が帰る時「明日朝迎えに行く」と言っていたが……

もしかこの耳障りな玄関チャイムが俺を呼ぶ死の声なのか……朝6時に……

「佑く〜ん！ 学校行くよ！ 遅刻したいのか〜？」

「早く起きなよ、馬鹿野郎。初日から遅刻して初日から退学になれ
ばいい」

ああ〜うるせえ……うるせえ、うるせえ、うるせえ！　なんで学
校行くのに6時なんだ。早い……

「早く行くよ！」

……

「おはよう。佑くん」

「ああ」

「佑輔おはよう」

「ああ……」

「佑くん！　初日なんだからもつと元気出して行こうよ！」

「ほら、元気出せポンコツ」

一々言葉が突き刺さる奴だ。もう返す返事を考える事も面倒だ。

ああ実に面倒だ。

朝ごはんを食べようと思ったが、紗弥夏に「そんな時間無いよ！」
と言われ敢えなく断念。

自転車で学校へ向かう。昨日買い物に行った時、その学校を見掛
けたが、普通の校舎で特に凄いとも感じなかった。

さて、これからどんな学校生活が俺を待ち受けているのだから……

自転車で1時間。

その距離に学校はある。

何故こんなに早く家を出たか、その理由はここにあるようだ。そ
れでも早く着きすぎじゃないか？　何をして暇を潰せば良いのだ？
初めて来る学校で堂々と遊べるかよ。そんなマナー知らずで堂々
自信過剰家では無いぞ。さあどうするべきか……

「佑輔、此处」

その冷めた声が鼓膜を凍らせようと冷気を送る中、俺がしなけれ
ばならない事がどうやら決まっただけらしい。

「遅刻しちゃいけないでしょ？　佑くん、今日が初日だから……」

「それは分かってる。何でこんなに早く来たんだ？」

「だから……遅刻しちゃいけないでしょ？」

「その為か？」

「うん……」

「ふざけるな！」

「えーと、小明あかりゆうすけ佑輔といいます。これから宜しくお願いします」

そして、担任のじゃがいもみたいな顔した先生に席の位置を決め付けられ、その目的地を目指して黙々と歩いている……のだが、どうも行きたくない。窓際の後ろから2つ目の席。俺が思う最高の特等席だろう。だが、だかだ、隣に紗弥夏、その後ろが加奈という最悪の位置に当てられてしまった……ただでさえいつも一緒にいるのに、学校でも一緒かよ……まあ全く知らない奴と居るよりはいいか……

「よう！俺は筒下光太つつしたこうた。これから宜しくな」

後ろの席の奴が話し掛けてきた。

「ああ、宜しく」

こんな返事でいいのだろうか。どうやら悪い奴ではないようだ。こいつと友人関係になるのも悪くはないか。

「佑くん、とりあえず学校案内してあげるよ」

「佑輔が迷って泣かないようにね」

一言多い。

「ここが職員室。何かあったら先生に言いなよ」

「ここが学食室。ご飯はここだけど、佑くんはお弁当だから行かないよね」

そんな学校案内をされながら初見の学校内を探索している最中、俺の背中に何やら覚えのあるような物が飛び込んできた。

「小明さん！」

「何だお前は！」

「私ですよ！ 私！ あみやみずき 天宮観月です。覚えていませんか？」

天宮観月……

「知らないな」

「知ってるくせに！ 嘘付かないで下さいよ」

「ああ、覚えてるよ」

そう。覚えているとも。こいつも幼馴染みに属する位置にいるだろう。年下だが、昔一緒に遊んだ相手だ。何年経っても変わらない事もあるんだな。昔の雰囲気が漂いすぎだ。

いつも後ろから突っ込んできて、もう驚く事は無いけど体には悪い、そう思うよ。

「久しぶりですね。私に何も言わないで行っちゃうんですからも
お」

「悪かったよ」

「本当ですよ。もう」

そんなこんなで学校初日は幕を閉じた。別に至って変わっている所の無い、普通の学校だった。まあ俺に合っているかな。

晩。紗弥加と加奈は佑輔の父親と話をしていた。

「本当ですか？」

「ああ。残念だけど、本当なんだよ……」

「嘘！ 嘘ですよね？ 嘘って言うてくださいよ！」

「本当なんだ……だから、それまで今まで通り接してくれればいいよ」

「分かりました……」

その時がくるまで……

三等星 近距離オリオン

三等星 近距離オリオン

今夜は綺麗な星空だ。とても気分が高々と弾む。

俺は星が大好きだ。オリオン座とかおおくま座とか獅子座とか。見てるだけとはいえ魅力的で、心が和み、少年のキラキラした目になっってしまう。

素直に俺は感動しやすいタイプなのだ。初めて星空を真剣に見た時は「うわあ、すげえよ。スゲー」とか言っただけで泣きそうなく感動していたであろう。詳しくは覚えていないが。

また明日学校か。

授業も始まるし、今日は休む事にしようかな。親父はまたどっか出掛けてるみたいだし。

おやすみ。

ハア……またか。またこんな早い時間に……

「お前ら今何時だと思ってんだ！」

「おはよう、佑くん！」

スルーですか……そうですか、僕の質問なんて興味がないと……
はいはい。

紗弥加は話にならないな。加奈なら少しは聞いてくれるかも……

「おい、加奈。今日はまた、なんでこんなに早いんだ？」

「……えっ？」

なんだその気の抜けた返事。違う事を考えていて聞いてなかったっけか？ 俺も嫌われたもんだな……

「え、じゃなくて。どうしてこんなに早いんだよ」

「ああ、佑輔は知らないの？ あの学校は始業式の次の日は休みなのよ。いろいろ準備があるでしょうって事らしいけど」

なんて適当な学校なんだ。

「って、答えになってないぞ。どうしてこんなに早く家に来たんだ？」

「佑くん、まだ引越しの道具片付け終わってないでしょ？ 手伝ってあげるよ」

それはそれは、有り難い事なのだが、早く来た事とは関係がないと思うがな。

今日もまた俺の親父は朝なのに家にいない。都会とは違い、近所付き合いや幼馴染みとの隠し事がない付き合いがあるというのは確かに良い事だけど、睡眠時間は全く別物の話だ。

そんな事を考えている内に紗弥加と加奈は「腹が減っては仕事は出来ぬ」と言わんばかりに朝食を作り始めた。

朝食を用意してくれるのは、まあ嬉しいし有り難い事だな。

完成。

「それじゃあ、皆さんと一緒に……」

「いただきます！」

これは俺達がガキの頃から恒例のものだ。いい加減、今思うと少し恥ずかしい事だとは思うけど、どうしても反応してしまう自分自身が憎い。

「食べ終わったら、しっかり佑くんの部屋を綺麗にするわよ！」

と、家主よりも気合いが入っている紗弥加であった。

加奈はというと、まだ気の抜けた雰囲気を出している。まあ、いつもの事ではあるけどな。そんなに気にするような事じゃないだろう。

「よし、じゃあ皆さんと一緒に……」

「ごちそうさまでした」

もう説明は要らないと思うが、これも昔からの約束だ。やっぱり恥ずかしいよな……

「佑く〜ん！ この段ボールの中何が入ってる？ なんかCDって書いてあるけど？」

「紗弥加、その中身はご記入通りCDが入っているのですよ……」

「そうなんだあ！」

「じゃあ、佑輔。この『マル秘雑誌』っていうのは？ 中には何が……」

「待て！ 待て加奈！ 開けるな！」

「きゃあああ！ きゃあああ！」

だから言つたろ……開けるなつて……ああ、俺へと信頼が無くなるな……どんな暴言やら苦情、苛めの言葉を吐かれる事やら……

「佑輔の変態、変態、変態、変態、ヘンタ〜イ！」

「きゃあああ！ 佑くんこんな本を……」

「違う！ 違う、違〜う！ それは親父のだ！ 半分以上は……」

「半分以下は……？」

「それは……早く片付けするぞ……」

「はい……」

「佑輔、変態」

「うるせえ」

はあ、俺だつて健全で健康で現在に生きる思春期な男子高校生だぞ。それくらいは許してくれよ……

「よいしょつと。はあ〜」

「紗弥加、ずいぶん親父臭いな……」

「まあね、エヘヘ」

部屋の整理も佳境に突入し、あとは並べて終わりだ。やはり、人数が多いほど早く進む。

「私、家にお弁当取りに行くね」

加奈はそう言い残し、部屋を出ていった。

加奈の家は俺の家から自転車ですくくらの近場にある。どうや

ら、弁当を作ってくれたらしい。有り難いな。

加奈が部屋から出ていくのを確認したように紗弥加が言葉を紡ぐ。

「佑くん……あのさ……」

「何だよ、紗弥加らしくないな。どうしたんだ？」

「あのね、あの……本……」

「うわぁ、え」と……」

やめてくれよ、その話は。怒ってるなら怒ってるって言ってくれ。

気が重たいから……

「……たしで……れば……」

「ん？」

紗弥加は下を向いて何か言にくそうに口を動かしている。耳を少し赤くして。

「私でよければ……」

「なんだ？」

「いいよ……あの……本みたいにさ……」

「なっ！」

何を言いやがる！ 突然すぎるだろ。そつだ突然すぎる。何を言

つてんだよ、紗弥加。あゝもう頭の中がクラッシュして回らない。

なんだ？ なんだ？

「お、おい、紗弥加。何言つてんだよ、冗談ならやめてくれよ。な？」

「冗談じゃないよ……私、相手が佑くんなら……」

「うわぁ……」

そんな事を言いながら、紗弥加が顔を近づけてくる。真っ赤に染まった綺麗な顔が徐々に徐々に俺の顔へと……マズイって！ マズイよ！

ガチャ。

「持ってきたよ、お弁当。あれ？ どうしたの佑輔、顔赤いよ？」

「あ、ああ、ちょっと動いたから暑くてな」

「そつ、ならいいけど……」

危なかった……加奈にあんな所見られたら一生の終わりだよ。はあ……助かった。

「佑くん、加奈が持つてきてくれたし、お昼にしようか！」

「あ、ああ」

何もなかったかのように笑顔でいる紗弥加。

どうしたんだ……紗弥加……お前はどこか頭の大事な部品を無くしたんじゃないか？

そして、また恒例の「いただきます」と「ごちそうさまでした」を言い、食事を終えた。

部屋も十分片付いたし、今日はもう用は済んだようなもんだな。

「おい、お前ら。今日は片付けありがとう。っでもうほぼ終わりなんだけど、この後はどうするんだ？ 何かまだ用があるか？」

「佑くんの部屋が片付いたなら用はないけど……」

「そうか」

「じゃあ、また夜、佑輔の家に来てやろう。どうせオジさんも帰ってこないと思うから、夕飯も作ってあげる」

「それは有り難い」

「じゃあ、また夜来るね。佑くん」

そして、二人は家から出ていった。

「紗弥加、ちょっと待ってて。私、忘れ物してきたから取ってくる」
「うん。じゃあ、此処で待ってるから」
「分かった」

ガチャ

「どうした加奈？ 忘れ物か？」

「あの……佑輔……」

「なっ！ 何を……」

……

「じゃあね。忘れた事はしっかり果たしたから」

「あつ、ああ」

突然。今日はその言葉がキーワードだったらしい。

突然とはどうして驚いているのに否定的な行動が出来ないのだろう……

加奈とキスをした。あの時、実は紗弥加ともキスをした。今日、この二人にキスをされた。されたって言うത്響きが悪いな。キスをした。

何故かは俺にも全く分からない。俺が知りたいからな。

何か特別な事でもあったのか？気になるなんてもんじゃないだろう、これは……

「加奈、佑くんの家に行くよ！ 早く！」

「うん……分かってるよ」

「泣いたりしちゃ駄目だからね……」

「分かってるよ……」

「じゃあ、笑顔！」

「うん」

「行こう！」

星は今日も輝く。

誰もが平等に照らされて、誰もが浴びる舞台照明のように。

その光を浴びなくなった時、人は自分で星のように輝いた証拠なのだろう。

四等星 仲良しのナイトロフト

四等星 仲良しのナイトロフト

なんか最近疲れたな。村に帰ってきたのは良いけど、驚く出来事とか早起きとかで体が変になった気がする。気のせいだろうか。あゝ体が思うように動かない……少し休みが必要だな。紗弥加と加奈にも言っておこうか。あいつらに言わないと何をされるか分からないからな。1日くらい学校を休んでもいいだろう。と、自分を納得させようとしていると、

ピンポン……

またこんな早い時間に……あの二人が持っている時計はきっと壊れているに違いない。

「佑くゝん！」

「佑輔！」

同時に2つの声、呼び名から呼び出しされ、仕方無く玄関へと降りていく。

「おはようございます、お二人さん。今日はまた、いつにも増してお早くいらっしゃったんですね……」

「佑くん、学校行くよ！ 早く準備して」

例により、俺の話はスルーされフレームアウトしていくのであった。

「今日は休みたいんだ。ちょっと体が思うように動かなくてな。きつと疲労だと思っただが……」

「佑輔……本当に？」

「ああ。だから、今日は休む。ごめんな」

「仕方無いね。じゃあ、お大事に。学校終わったらまた来るから。行こう、加奈」

「う、うん……」

そして二人は家から離れて行った。

俺はまだ寝不足だからこれからまた睡眠を果実栽培の取り放題の如く思う存分とってやろうと思うのだが、誰か反論を訴える朝に強い御方達の種族の人はいるだろうか？　なんて、くだらない事を考えてみるのであった。休みは良いが退屈だな。

親父はまた今日も家にいない。必死に仕事をしてくれているのなら心配をする必要もないのだが、果たして真実はどうなのだろう。遊び呆けていたら一発体罰を与えなければならぬか。まあ、あの親父の事だ。どうせちゃっかり仕事はこなしているはずさ。

平日の午前がこんなにも静かだったとは生まれてこの方、初めて知り得た情報だ。和やかな平和的国民定休日ではなく、個人的自己満足疲労休憩日に相応しい自然に包まれた日だ。

ベッドに寝ながら辺りを見渡す。近くには人1人いない。まだ、午前の本場の時間。テレビはニュースばかりの情報伝達の時間帯。する事もなく本を手にする。普通の小説だ。読み始めて2ページ頃、ついに思ってしまった。

「静かすぎる……物足りないな……」

それは俺があのだ二人を必要としているサインなのだろう。強がっていないながら俺も可愛らしい所があるもんだな。自画自賛というのだろうか、はたまた、ただの寂しがり屋か、答えはまあどちらでもいい。

本を読み続け、一冊読み終わった頃にはちょうどお昼を少しばかり過ぎたところであった。

俺は食事を求め、覚束無い足取りで階段を一段一段降りていく。そこに家主を呼び出すチャイムが鳴った。何か宗教の勧誘とか化粧品のお勧めなら間に合っているぞ。何処の誰だ。体調が悪い俺を呼び出す奴は。

「はい、どちら様でしょう……か……？」

「佐輔、お弁当」

「おっ、おう。サンキュー……学校はどうしたんだ？」

「今は昼休み中」

「そりゃ今は昼休み中だろうな。だが、俺はそんな簡単に騙されやしない。学校から此処まで来るのに1時間掛かるって事知ってるか？ どう考えても4時間目から抜け出さないとこの時間に俺の家には来れないのだが、さて、どういう事だ？」

「ちくしょう、バレたわ」

「バレバレだ」

と、加奈はなんとなく悔しいような台詞は吐いているが、顔は最初からバレる事など分かっていたという表情をしている。

「つで、どうしたんだ？」

「だから、へたばってる佑輔とお昼でも一緒に食べてやろうと思ったのよ！ 悪い？」

「悪くはないが、それだけの為に学校を抜け出してきたのなら悪いな」

「うるさいわね！ 早退してきたのよ……」

「体調悪いのか？」

「今の佑輔には言われたくないわ！」

そりゃそうだろうけどさ。玄関で話すのも変だから、とりあえず俺の部屋へ行く事にした。下を俯いたりしている様子を見ると、本当に体調が悪いのかもしれないと思えてきた。いやっ、加奈を疑っているわけではないが、こいつの事だから仮病も高確率で有り得ると思っただけだ。

「本当に体調悪いなら家に帰って寝てた方が良いんじゃないか？」

「佑輔に言われたくないわ……」

「はいはい、分かったよ。じゃあ、俺のベッド使って良いから、とりあえず体休ませるよ。自転車漕いできて疲れただろうしな」

「あ、ありが……とう……」

そう言って、加奈はベッドに入って俺がいる方ではなく、反対側に顔を向けた。

確かに恥ずかしい気持ちは分からなくもないが、幼馴染みなんだ

し、それくらいは捨ててもいい気持ちだと思っけどな。まあ、いいか。

それから、しばしの沈黙。

「なあ、加奈。本当はなんで帰ってきたんだ？ 何も余計な事は言わないから教えてくれよ、な？ 隠したって幼馴染みなんだから少しは勘づくさ」

「喧嘩したの……」

喧嘩。加奈が喧嘩して帰ってくるほど落ち込む相手といたら、ただ1人しかいないだろう。だが、信じ難い事だ。まさか、あいつと喧嘩するなんて考えられない事だ。それほど大きな事が起きたのだろう。

俺に二人を癒して、また繋げる事が出来るだろうか、それとも二人から近付くか？ いやっ、それはないな。こいつらは喧嘩なんて初めてだろう。

「大丈夫……なのか？」

「大丈夫だと思う？ 私、なんか不安なのよ……」

「そりゃ、そうだろうな」

「どうすればいいのかなあ……分からないよ……」

「喧嘩の理由は？」

「それは言えない」

完全な拒絶信号だな。危ない、危ない。余程の事があつたんだな……こんな時、どうすればいいのか分からない。

俺は座っていた勉強机の椅子から立ち上がり、ベッドの加奈の前で立ち止まった。

「……加奈、いくぞ」

「なっ、何よ？ 嫌よ！ 私だつてまだ嫌だから」

「何言つてんだ？ おい、加奈。なあ、加奈。早くしようぜ……」

「……心の準備がまだ……だつて……だつて……まだ早いよ。幼馴染みだし……」

「さっきからぶつぶつ何言つてんだ？」

「だって佑輔が……その……私を淫らにしようと……」

「なっ、何言っただよ！ 俺は学校行くぞって言っただよ！ 紗弥加のところに行くぞって言っただよ！」

「……………バカ」

勝手に勘違いしといて悪者は俺だよ。いい加減にしてくれよ、もう。それにしても、こいつも本当に大人になったんだな。なんだかこっちが照れてくるな。

「でも、佑輔、体調が……」

「お前らの喧嘩のせいで頭が心配で変になりそうだ。こればかりは治したいからな」

「……………ありがとう……………」

そんな事をいいながらも、泣きそうな加奈を横にしてお昼だけはしっかり食べた。俺の為に作ってくれていた弁当だし、食べないと失礼だからな。もつとも、加奈は料理がやたらと上手いから理由とか無しに真面目に食べたかったが。

やはり味は最高だった。

そして、俺は制服に着替え、加奈と学校へ向かった。

加奈はずっと心配そうに顔を曇らせて俯いている。

こいつは意外と心配性だったらしい。

学校の門の前。なかなか足を前に出そうとしない。本当に紗弥加は怒っているのだろうか、加奈が勝手に一人芝居のように紗弥加の前で怒鳴ったりして飛び出してきただけなんじゃないだろうか。紗弥加が怒っている姿も見たいものだ。

加奈の決心が定まるまで長々と俺は待ち続けた。門の前で立ち止まる加奈を横目に俺はずっとレンガで出来た門に寄り掛かって待った。待ち続けた。

結構長い事待ったな。さすがにこれはへたばる。もう、下校する生徒の姿も伺えるようになった茜色の下。もしか、こいつは態とこの時間まで待ったのかもしれない。自分から行くのが嫌だからって、相手が来るのをひたすら待っているのかもしれない。意外と根性が

無いんだな。

そんな事をずっと考えていた時間にも終わりは来るわけで、とうとう、その姿を発見する事が出来た。1人で黙々と歩いて門に向かう紗弥加の姿。それをただ見詰める加奈。なんだ、この緊張感。幼馴染みってこんなに大気を動かせるほどの冷気を出せるのだろうか。一步一步、確実に近付いてきた紗弥加は俺達の目の前まで来て止まった。

沈黙。

「どうしたの、佑くん？ 体調が悪いんじゃないの？ 寝てないとダメだよ！」

「体調が悪いのも気にならないほど、心配事が脳に入ってしまった。な。こっちの方が重症の原因だ」

「そう、なんだ……」

「紗弥加……」

加奈は聞き取ることが精一杯というほどの音量の声を出して言った。きつと、目の前に相手がいるから勇気を出すしかなかったのだろう。

「何？ 加奈」

「あのね……ええーと……ごめんね……」

「もう大丈夫だよ！ お互い様だから。私こそ、ごめんね」

丸く収まったみたいだ。喧嘩の原因とは一体何なのだろう。聞きたいけど、聞かない方がいいのかな。まあ、後で気が向いたら聞く事にしよう。

「仲直りだよ、加奈！」

「うん……ありがとう」

「じゃあ、仲直りの記念に、行こうか！ ね！ 佑くん」

「久しぶりだな」

俺達が仲を確かめるために行く場所はその3階建てのビルの屋上だ。俺達の思い出の場所。俺の大切な場所。

そこは、俺達がガキの頃に決めた絆の場所。

五等星 思い出のアスタリスク

五等星 思い出のアスタリスク

「なあ加奈。もう泣くなよ」

「んう……ぐう……ずずっ……うえん……」

「加奈、一緒に謝りに行ってやるからさ」

「うん……」

加奈はずって泣いていた。どうやら紗弥加に酷い事を言ってしまったらしい。

僕はそこにいなかったから分からないけど、紗弥加は怒ってないと思う。たぶん、落ち込んでるよ。

「よし、じゃあ、早く行くぞ！」

「うん……」

そして、僕と加奈は紗弥加の家まで来た。玄関の前でずっと入るのを躊躇っている加奈。僕は加奈が勇気を出して中に入るまで待つ事にした。

それから数時間。

「加奈、大丈夫か？ もう帰るか？」

「……ううん。ちゃんと謝る……」

「そうか、じゃあ、早く謝りに行こうぜ」

「……」

人の家の玄関の前に何時間もいるなんて犯罪を犯しそうだよ。僕はちよつと気まずいんだけど……頑張ってくれよ、加奈。謝るだけだよ。

やっぱり、加奈は涙目で立ち尽くすだけ。僕も疲れて帰りたくなつたけど、やっと、その時は来た。

ガラガラッ……

玄関のドアが開いた。

「……加奈、佑くん、どうしたの？」

紗弥加が出てきた。どうやら庭の花に水をあげるために出てきたみたいだ。右手にシャワーのキャップをつけた水の入ったペットボトルを持っている。

そこでまた、立ち尽くして沈黙。

「……さや……紗弥加……」

「何？ 加奈」

「ごめ……ん……な……さい……酷い事言つて、ごめんなさい……」

「加奈、大丈夫だよ。怒ってないから。紗弥加こそごめんね。お互い様だよ」

「うん……」

大きい喧嘩ほど、仲直りするのは早いみたいだ。勉強になった。二人は本当に仲良しなんだよ。僕にはそれが良く分かる。だって、産まれた時からずっと一緒にいる幼馴染みだから。僕達はずっと一緒にいて、仲良しだから。

「佑くん、今日星出る？」

「うん！ 今日はずれてるから、いっぱい出るよ！」

「じゃあ、やりたいな」

「じゃあ、今日はとっておきの場所に行こう！ 陽が落ちたら、あのビルの前に集合ね」

「何するの？」

加奈は涙目で鳴き声混じりの声で尋ねた。

「加奈、そんなの決まってるでしょ！ ねえ、佑くん！」

「うん。やろつよ」

僕は息を大きく吸って、はっきりと言った。

「天体観測！」

今日の陽は月へと灯りのバトンを渡して、もう夕方も過ぎそうな時間、僕達は3階建てくらいの大きさのビルの前に集合した。加奈は懐中電灯を3つ持ってきた。紗弥加は何が入ってるか分からない

が、ナップサックを背負ってきた。

そして、僕は望遠鏡を担いできた。なかなか重かったけど、言わない事にしよう。ムードをぶち壊しにしたくないから。

「よし！　じゃあ、行こうか！」

「うん！」

紗弥加と加奈は同時に返事をした。

ビルはもう、破棄されているもので、決して綺麗で大きいとは言えない。

僕達はビルのドアを開けて、階段を駆け上がった。一段一段、楽しい気持ちを隠しきれないようなリズムを奏でて、僕達は上がっていく。

そして、屋上に繋がるドアの前にきた。上がってきた勢いでドアを開ける。

そこにはコンクリートで出来た地面の何も無い屋上があった。と言っても、僕はお父さんと良く此处で天体観測をしているから行き慣れてるけど、紗弥加と加奈は此处で天体観測するのは初めてだ。いつもは僕の家のレストランでやっていた。

「わぁー、本当に何も無いんだね」

「うん、そうだよ。紗弥加、そのリュックの中に何が入ってるの？」

「これはねえ。そうか、明るい内にやろうね」

そう言っただけで紗弥加はナップサックをひっくり返した。中からはいろんな種類のペンやクレヨン、ペンキが出てきた。

「ねえ紗弥加、これで何するの？」

「加奈はお絵描き好きでしょう？」

「うん」

「だから、仲直りの証と、これから仲良しでいる約束として、ここに残そうよ！」

「面白そう！」

そして、二人は絵を描き始めた。お互いの似顔絵や星の絵。何だかよく分からないモノの絵。とにかく沢山描いていた。

「佑輔も一緒に描こうよ！」

「僕はいいよ。此処で星を見てる」

「じゃあ、これだけ描いて」

紗弥加が指差した先には、違う色で大きく書かれた二人のフルネームがあつた。

赤い色で『月宮紗弥加』、オレンジで『星崎加奈』、そして、僕に渡された色は青だつた。

「ね？ 佑くんも書いて。お願いだから」

「わかつたよ」

そして、僕は青い色で『小明佑輔』と書いた。

「もし、喧嘩した時は仲直りの証に此処に来ようね！」

「うん！」

加奈は元気に返事をした。

そして、それから3人で天体観測をして、家へとそれぞれ帰つた。その晩、僕はお父さんから引越しをすると聞いた。

引越しは1週間後。僕は1週間でプラネタリウムを作つて、あまり星に興味が無さそうな加奈の為に小さな望遠鏡を買つた。

そして……

「本当に行っちゃうの？」

「うん、もう決まっちゃつた事なんだつて」

「……くすつ……ああ……」

「紗弥加、そんなに泣かないでよ。僕、いつかまた帰ってくるから」

「本当に？」

「うん！ 本当に」

「約束だよ？」

「分かつた。約束！」

「じゃあね……」

六等星 両想いのコーラスレター

六等星 両想いのコーラスレター

3階建てのビルの前。俺達はその場所にいる。

懐かしさを感じさせる陽が落ちた頃の空。昔よりも更に古ぼけてしまったビルの姿。こいつもどうやらそろそろ寿命らしい。「来年には取り壊される」この村に戻ってきた日に紗弥加が言っていた。あの時は、まだ1年ある。と、思っていたが、今思うと、あと1年しか無い。

その間に何度、此处に3人で訪れる事があるのだろうか。悲しいようで嬉しい気分だ。

こんな気持ちは何と呼ぶのだろう。

「よしっ、じゃあ、中に入ろうよ」

「そうだな。おい、加奈、早く行くぞ」

「分かってるわよ。佑輔に言われなくなつて……」

「ああ、そうかい」

相変わらず、口が悪いのは健在のようだ。

俺達は階段を一段一段上っていく。仲直りの証に訪れると決めた場所。その場に行こうという3人の足音は階段をリズム良く上るように響く。俺はなんとなく昔の事を思い出した。

ガキの頃もこんなリズムでこの階段を駆け上がった事があったのだろう。詳しくは思い出せない記憶図書館の奥に放置されているが、俺は3人で駆け上がったと思う。

たぶん、今みたいに。

ドアを開けて屋上に出る。

そこには10年前に訪れたままの懐かしい景色が広がっていた。
「懐かしいね」

「お前ら、俺がいない時に此处に来なかったのか？」

「私達は喧嘩なんかしなかったし、佑くんがいないと望遠鏡ないから天体観測も出来ないし。来る意味がなかったんだよ」

「そついう事、分かった？ 佑輔」

「ああ、分かったよ」

いつも何だか上から見下ろすように喋る加奈。

「これ、まだ消えてなかったのかよ」

「そつみたいだね。すごいなあ……私達の絆の強さだね！」

「紗弥加の言う通り」

「そつだな」

まだ、残っていた3人の名前。消える事のない名前なのだろうか、俺は微かにそう思った。

10年経っても残っているんだ。これは本当に凄い事なのかもしれない。でも、ペンキでベツタリと描いた絵やスプレーで描いたモノもまだ残っているし、そついや、落書きとかは犯罪だよな。まあ、この村だし、許してくれるかな。

「今度は天体観測しようね。ちゃんと3人で天体観測しようね！」

「そつだよ、佑輔！ やろう、天体観測」

「あ、ああ。分かったよ」

なんだよ、いきなりテンション上がって。そんなに強く言わなくても、ちゃんとやるって。全く、まるで俺が寿命間近の主人公みたいじゃないか。勝手に想像で殺すなよ。

そして、俺達は階段を降りて、屋上をあとにした。最後に紗弥加が「また、来るからね」とビルに言葉を投げた。ちよつと、大袈裟過ぎる気がするけど、紗弥加の天然ぶりだと思えば、心配事ではなくなる。

俺達はそれぞれの家に帰って、今日という日を半分忘れて、明日を脳に詰めるために就寝した。

翌朝、事件は起きた。

いつもは一緒に学校に行くのに、紗弥加と加奈が別々に「今日は

用事あるから、先に行くね」と俺に伝えて学校へと向かっていった。また、喧嘩でもしたのか？ そんな事はないか。俺は心配性なんだな。仕方無い、たまには1人で登校するのも悪くはないだろう。自転車に乗って1時間。やはり、感じてしまった。1人は寂しいと。

学校に着いてからは、その気持ちも少しずつ姿を消してきた、最中、その瞬間は来た。

「はあ、今日も学校か。面倒だな……」

そんな嘘丸見えの言葉を吐き出しながら、下駄箱を開けた瞬間、1枚の手紙が見えた。これは、青春時代の定番、ラブレターだろう。か。と、興奮気味に少し気を緩めて上履きを取った時、又もやその下から手紙が出てきた。1日に2枚？ これは、俺にも青春が本当に来たということか？ 恐らく、後に手紙を入れてくれた人は気付かなかつたのだろう。手紙が1枚入っていた事に。気付いていたら照れたり、衝撃を受けて入れられないだろうからな。

頭がぼーとする。そんな浮わついた気分のまま教室へと辿り着いた。そこには、既に登校していた紗弥加と加奈が仲良く会話を交わしていた。どうやら喧嘩はしていないらしい。一応、手紙は見られないように机の中に……

「佑輔、その手紙は何だ？」

「ちよつ、待て、光太！ 取るなよ！」

「まだ取ってないだろ。佑輔は青春ドラマの正にこの場面を演じ中の主人公か！」

下手で長いツツコミをありがとう。

「つで、その手紙はどうしたんだ？」

「さあな、それを見ようとしたところにお前が来たんだろ」

「そうか、そうだったのか……そうだ、佑輔に言わなきゃいけない事が……」

誰からの手紙だろう。俺は可愛く折られた手紙を開けた。さっき、なんか光太が言っていたような気がするが、知った事ではない。今

はこっちの方が最優先だ。手紙を全部開き終わり、中を見た。そこに書いてあった文を読んで、もう1つの手紙も中を見た。まさかとは思ったけど、さすがにびっくりしたな。

その2つの手紙は殆んど同じ文章だった。違うのは名前だけ。たった、それだけの違い。

こんな事は有り得ないと思うが、実際に今、起きてしまった。こんな事は双子並みにお互いが溶け込んでないと出来ない事だろう。そう、双子並みにね。逆に言えば、双子並みの繋がりがあれば出来る事なのだろう。そんな信頼関係は産まれた頃からずっと一緒にいないで無理だろう。またまた、逆に言えば、産まれた頃からずっと一緒にいれば無理ではないのだろう。

そんな二人ならね……

『急にごめんね。こんな手紙なんて少し恥ずかしいけど、読んで欲しいの……私ね、小明佑輔（佑くん、佑輔）が好きなの。昔からずっと……それだけは知ってほしいから、こんな手紙を書きました』

放心状態。

「佑輔？　なあ、佑輔、聞いてくれよ。俺、親父の急な転勤で転校する事になった」

「へ？」

「だから、転校するから俺は好きな相手に気持ちを伝えようと思うんだ」

「相手って誰だ？」

「……月宮紗弥加」

「えっ？」

世間的な恋愛関係というのは、こうも狭いものなのか……紗弥加だと？　お前なんかに渡してやるものか。何だこの気持ちは……

「あと、星崎加奈。二人のうち、どちらかに告白する」

お前なんか……お前んかに加奈を渡してやるものか。じゃあ、俺はどっちを想っているんだ？俺はどうすればいい？何だこの気持ち……

1日休んで学校に来たのは良いが、まだ、体が上手く動かない。

七等星 痛みのマイタワー

七等星 痛みのマイタワー

あの手紙を貰って俺はどうしろっていうんだ。気まずくて話も出
来ないだろ……その日は1日、紗弥加と加奈とは会話を買わす事は
なく、帰りも1人で帰った。

家に着いてからも、頭がぼーとして何もやる気がでない。今日
は早く寝よう。そう思って布団に身を投げたが、やはり寝られるわ
けもなく、ただ時が朝になるのを待つのであった。

いつの間にか朝だ。

寝たかどうかよく分からない。たぶん、ちよつとは寝たと思う。
でも、イマイチ記憶がない。俺はぼーとした頭を何とかして起動
させようとコーヒーを口に含み、玄関に新聞を取りに行った。親父
は今日も家に居ない。村に戻ってきてから、いつも以上に忙しくな
っているように思えるが、気のせいだろうか。

朝食を食べていると、いつものように俺を呼ぶチャイムが鳴った。

「おはよー、佑くん！」

「佑輔、おはよう」

「ああ、おはよう」

いつも通りだ。まるであんな手紙が無かったかのように。

お互い知らないのだろうか。だから、隠すためにいつものテンシ
ョンでいるのだろうか。

「よしっ！ じゃあ、今日も元気だして学校行くよ！」

いつもながら、紗弥加はテンションが高い。その明るい性格も、
今は少し寂しく感じる。

「佑輔、早く行くよ。全く、足腰が衰えてるんだから」

こいつもいつもながら、口が悪い。

「悪かったな。まだ、疲れが溜まってるみたいなんだ。最近、体が思うように動かなくてな。俺も困ってるよ」

「そう、なんだ……」

なんだよ、その暗い声は。こっちまで暗くなるから、お二方、やめてくれ。

学校に着くなり、うるさい奴が近付いてきた。

「佑輔！」

「なんだ、もうじき転校生」

「その呼び名はやめてくれ。何気に落ち込んでんだからよ……俺だって、お前と会えなくなるのは寂しいさ」

「俺は寂しくない。さっさと転校しろ」

「ああ、酷い！ 酷い！」

うるさいな。だから何だっていうんだ。俺は残念ながらお前に特別な感情は抱いていないものでな。会わなくなってもすぐ忘れられそうだ。

「佑輔、俺は今日、遂に想いを告げようと思っている。協力してくれるか？」

「全力で却下する」

「なんでだよ！」

「勝手に告白でもなんでもしててくれ。俺は結果だけ聞いてやるから」

こいつの告白なんて興味がない。いや、相手が紗弥加か加奈というのは非常に気になるが、結果はもう決まっているだろう。気に入る事はないか。

放課後。

「佑輔、じゃあ、俺は行つて来るぞ！」

「勝手に何処でも行つて来い」

「なんて、心優しくない親友だ……」

俺はお前の親友になった覚えは無いぞ。勝手に決めないでくれ。友達関係の仲の良さのランクくらい自分で付けさせてほしい。

光太は深く深呼吸をして、教室を出て行った。二人のうち、どっちに決めたのだろう。ちょっとついていってみるか……

光太は廊下を淡々と歩き、屋上へと向かった。どうやら、待ち合わせは屋上でしているらしい。手紙でも渡したのだろう。似合わない事をする奴だな。

光太が屋上へと姿を消した。俺も屋上のドアのガラス窓から様子を伺う。ん？ はっ？！ バカかあいつは！ 二人とも呼んでるじゃないか。一体何を考えているんだ。

「光太くん、話って何？」

紗弥加が本当に不思議そうに質問をした。

「右に同じ」

加奈は誰にだってそんな喋り方なのか？ 愛想の無い奴だ。

「時間が無い中、二人には悪いと思っている……」

そして、光太は転校する事を話し始めた。紗弥加は「うん、うん……」と頷きながら話を聞いていて、加奈はまるで興味がないように、空を見ていた。

「これからが本題なんだ」

やっと、転校の話が終わり、光太はまた深く呼吸をし、ついに言葉に出した。

「俺は、お前達二人が好きだ」

最悪の告白だね。男の俺からもそう思えるよ。告白って相手が一人大から告白してる方も格好良く見えるものだ。それなのに、こいつは同時に二人に告白をしている。本当に最悪だ。

「そ、それって、私と加奈が好きって事？ 二人とも？」

当然の反応だ。普通はおかしいと思うよな。

「ああ、俺は二人とも好きだ。だから、どうしても気持ちを伝えなかった」

加奈は何も言わない。

「光太くん……ごめんね。私、好きな人が居るの……」

「星崎は、誰か好きな人が居るのか？」

「……いる」

「そうか……」

そして、振られる。なんて最悪な告白だ。見てる方はもう笑ってしまうね。

「じゃあ、俺はもう転校する。最後に誰が好きなのか言ってくれないか？ そうじゃないと、スッキリしないんだよ」

なんて自己中心的な奴だ。

「で、でも……恥ずかしいよ……」

「……右に同じ」

どうやら、加奈も照れているらしい。

「じゃあ、その相手を同時に言ってくれないか？ そうすれば、混ざってよく聞こえない。恥じらいもなくなるだろ」

「うん……」

「じゃあ、加奈、言うよ？」

「……うん」

「せーの……」

「小明佑輔！」

見事に二つの声が綺麗に重なった。光太も少し驚いた顔をしている。

「佑輔……でも、佑輔はもう長くないんだろ？」

「……」

こいつ、何言ってたんだ？ 俺は髪なら普通の長さだぞ。足だって短いわけじゃない。何が長くないんだ？

「俺は知ってたんだよ。お前達の親友で天宮観月っているだろ？ あいつは俺の生き別れの妹だ。そいつが毎日毎日俺の所に来て泣いてるんだ。」

「……」

おい、なんで紗弥加は何も言わないんだよ。加奈もなんか言えよ。俺は堪え切れず、屋上のドアを開けた。

「おい、どういう事だよ？」

「ゆ、佑くん！」

「なんで、お前がこんな所に居るんだ？」

「気になってついてきた。そんな事より、長くないって何の話だよ。観月が泣いてるって何の話だよ！」

「佑輔、落ち着いて！」

「うるせえ！ 何の話だか教えろよ！ うっ……」

「佑くん？ 佑くん！」

「おい、しっかりしろよ！」

「佑輔！」

その事実を俺は初めて知った。

今日も星が見れそうな、晴れた日だった。

八等星 空白のカムパネルラ

八等星 空白のカムパネルラ

起きた時にはベッドの上にいた。見た事の無い天井。どうやら、病院のようだ。

初めて来たが、決して綺麗とは言えない室内だ。東京にいる時にあった病院は真っ白だった事を覚えている。それに比べてこの病院は少し焦げ茶色になりかけている部分があったり、ヒビ入っていたり、田舎を強調させるモノだ。

それにしても、何故、俺は病院で寝ている？

横開きではなく、まだ押す引く形式になっている病室のドアが開いた。

「あつ、佑くん！ もう大丈夫なの？」

「ああ。何だか分からないな。逆にどこが駄目でここに寝ているのかを教えてほしい」

「アハハ……そうだね」

紗弥加は少しひきつった顔で笑っていた。隠し事か……紗弥加は正直だからな。

俺は一体どうしてしまったのだか。

紗弥加はもう学校だからと病室を出ていった。

昼、1人。

寂しさが残る紗弥加が去った病室。俺は無言の部屋の中を眺めて、何もする事がない事に暇感を抑えられずにいる。外を眺めても、青い空が一面に広がっているだけで面白味がない。いいや、確かにとっても綺麗だ。だが、今は俺を嘲笑うようにしか見えない。まるで1人暗く落ち込んでいる人の側でゲラゲラ笑っている奴のようだ。実に迷惑極まりない。

暇だ。院内を散歩する事にした。まだ、来た事の無い病院だったから、中の事を良く知りたいし。どうやら、これからお世話になるみたいだからな。

しかし、一回りまわっても、面白味があるモノは1つもなく、俺は購買で週刊誌を買って自分の病室に戻った。

陽が沈みかけた時刻。

学校帰りの紗弥加が俺の病室を訪れた。

「佑くん、ちゃんと大人しくしてたかな？」

「ああ。とても静かに大人の週刊誌を隅から隅まで読みあさったよ。お陰様で大人の女性のカラダについて……」

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、佑くん！」

「冗談だよ。院内探索ツアーを1人で決行したり、東京にいた時は毎週集めてた週刊マンガ雑誌を読んだりしてたな。村に売ってないから諦めていたけど、まさか、病院で再び出逢えるとは……運命を感じる」

「そっかあ、良かったね！」

どうやら、紗弥加は興味なかったようだ。それもそうだな。

「紗弥加……ちょっと訊いていいか？」

「うん、いいよ。何？」

「加奈はどうしてる？」

「……学校も来てないよ」

「……そうか」

それは姿も見えないわけだ。きっと、光太はもう転校したのだろう。皆、俺の前からいなくなる。今までの「いつも」が薄々と消えていく。

今までは気にもしなかった寂しさを今は重たい程にそれを感じた。それは、重く重く……

……夢。これは夢を見ている。俺は何処にいる。

「貴方はだあれ？」

「僕は僕だよ。君こそ誰なの？」

「……貴方は最後に何になりたい？」

質問に無視なの？

「僕は……何に……」

「そう」

「僕は……生きていた証拠になりたい。僕が生きていた僕の証拠になりたい」

「貴方ならキラキラ光る素晴らしい証拠になれるわ」

「うん」

夢……

パツと目が覚めて気付いた。自分の姿が見えない、他人の姿が見えない夢。キラキラ光るモノ……？

何の事だか分かっていないのに、俺は誰かと会話を交わしていた。「……精神的病か？」

つい独り言を漏らし、病室に虚しく響いて消えていった。普通に考えればただの夢だ。夢なのだから奇想天外な異世界的、非現実的、説明不能な話も全て有りだろう。深く考える事はない。たとえ、それが自分の精神状態が産み出すモノだとしても。

「佑くん、おはよう」

病室のドアを開けて紗弥加が入ってきた。

紗弥加はいつも登校前に病室に寄っていつてくれる。有り難い事なのだが、毎朝、俺も早起しなきゃいけないのが、仇だ。辞めさせようか……でも、紗弥加が会いに来てくれるのは確かに嬉しいから、このままにしよう。

昼はいつも暇だ。

病室は殺風景で前に買った雑誌が一つ置いてあるだけ。さすがにつまらない、と思い、売店に何かあるか見に行く事にした。金もま

だあるし。

「……菓子ばっか」

食い物しか置いてないのか？ この売店はケチッてるな。また、雑誌でも買って戻るか……

病室に戻って雑誌を開いた。数日前に買った雑誌の最新号だ。前、新連載が始まった作品を読んだ。それは、なかなか面白い作品だったし、続きが気になる。それから読もうか……

ベッドの折り畳み式昨日のペダルを回して背凭れにして、雑誌を読み始めた。

「ふう……ん？」

少し読んで気付いた。話が繋がっていない。明らかに間が抜けている。

「おかしいな」

数日前の雑誌を読み返しても、やっぱり話が繋がっていないかった。

「……………」

その時、納得できない事の真相に気付いた。

「なんだよ、これ……」

数日前に買ったはずの雑誌はもう、1カ月前のモノだった。

どという事だ？ この病院は昔のモノまで売っていて、俺がそれを買ったのか？ いいや、それはない。売店には少しの量の本しか売ってなかったし。じゃあ、どうしてだ？

入院生活を始めて、5日目。

この日は俺に「真実」を教える日となった。

雑誌の事もそうだ。何かがおかしい事を俺に教えていた。

そして、その真相。

「ゆーくん！ 学校終わったよ！」

「ああ、もうそんな時間か」

紗弥加がいつもの笑顔で病室に入ってくる。俺の部屋は個室だから大丈夫だけど、合い室なら多大な迷惑だ。まあ、元気をくれるのは嬉しいけど。

「紗弥加……一つ聞いていいか？」

「うん、いいよ！ 何？」

「昨日も病院に来たか？」

「うん」

「俺は……起きてたか？」

「……………」

「……俺は最近、いつ起きてた？」

「…………… 1週間前」

これが全ての真相だった。俺は1日起きては1週間寝て、入院して5日目を過ごして雑誌を買ったはずが、入院1カ月で前に買った雑誌の1カ月後を買った事になる。だから、話も繋がらない。

「紗弥加、俺はそんなに悪いのか？」

「……分からないよ」

寝るのを恐れた。でも、体力はその気持ちをまんまと裏切って、俺を1週間の睡眠へと導いた。

「加奈、もう、辞めなよ。学校行こうよ。佑くんのお見舞い行こうよ」

「紗弥加、ごめん……まだ、諦めたくないの」

「私もそうだけど……加奈がおかしくなっちゃうよ」

「佑輔の代わりに体調が悪くなるならいいよ。佑輔が好きだから」

「うん……じゃあ、私は毎日、佑くんを見守るね。佑くんが好きだから」

「うん」

加奈の部屋には何冊も積み上げられた医学の専門本。

九等星 星空のプラネタリウム

九等星 星空のプラネタリウム

夢。長い、長い夢。

もう、明ける事がないかもしれない。何もかも分からない。

「佑くん、おはよう」

「あ、ああ。今日は起きたのか」

「……うん」

あれから、俺はいつ起きていたかをカレンダーに記しておく事にした。前回、目を覚ましたのは3日前のようだ。またまた、長い眠りについてた。最近では実感もわいてくるようになった。何日も寝ていると起きた時に久しぶりだ、という思いが自然と出てくる。それは今までの「いつも」が崩れたからだだろう。だから、これに馴れてしまえば、その「いつも」は消え、久しぶり、という感覚が「いつも」になるだろう。その内、起きてる方が珍しくなるのだろうか。

「佑くん、今日はゆつくりと楽しんでね」

「ああ。前は俺、何してたんだ？」

「本読んでたよ。それから、病院を周って、テレビ見てたって、看護婦さんが言ってた」

「そうか。じゃあ、今日は本の続きを読むかな」

「うん、頑張って」

「ありがとう」

「じゃあ、学校行くから」

「ああ、じゃあな」

やっぱり、紗弥加がいなくなると空白が空いたように心が悲しくて、ぼつかりと穴が空いている。

俺はどうなってしまうんだろう……そんな不安が脳裏をうろつろ彷徨いて俺を蝕んでいるようだ。嫌だ。凄く腹がたつ。何で、どうして、俺なんだよ。

それから、本も読まないでばぁーとしている内に、寝てしまった。そう、寝てしまった。

目が覚めた時。

目の前には加奈がいた。久し振りに見た加奈は何故か大人びて見えた。ずっと会っていなかったからか、または、そのちゃんとした姿が羨ましいからか。分らないが、加奈は涙目で俺を見つめていた。そう、涙目だ。あんなに会いに来てくれなかったのに。

「よお、加奈。久しぶりだな。元気にしてたか？」

「うん」

嘘だと分かったのは、しっかりと目を見開いて加奈を見た時であった。隈が目立つ目の下。血色があまり良くない顔。

「加奈、今まで何してたんだ？」

「勉強」

「何のだ？」

「……………」

人間は隠し事が下手だ。どうしても表情や声のトーンに出てしまう。それは仕方無い事なんだと思う。それでも不便だ。

「ごめんね、佑輔……私ね……私ね……」

「落ち着けよ。大丈夫、俺は待つてるから」

「うん……」

それから沈黙。

加奈は本当に素直な奴だ。自分の思っている事が簡単に表に出てしまう。でも、それは良い事なんだと思う。

「私ね、何か佑輔の為になんたくて、ずっと、ずっと、医学の本読んだの。でも、何も分からなかった……」

「そうか。でも、大丈夫だよ。俺は大丈夫だから。ほら、今もこんなに元気だろ？ 何が悪くて入院してるのかを教えて欲しいほどだ」
嘘だ。俺は今嘘をついてしまった。

加奈だって、俺が寝たきりでいたという事は知っているだろう。それで心配してくれたんだ。確かに、傍から見ればそれだけで全然体調自体には何も不自然な所は何ように見えるだろう。でも、俺はもう感じていた。自分の体調の変化に、激しく襲う頭痛に、起きたらすぐにでも戻しそうになる腹痛と気持ち悪さ、体が少し動けなくなっている事を。

そう、前からだ。疲れて動かないと思っていた体の本当の理由はこれだったのだろう。

たぶん、もう最後だ。
心配はかけられない。

佑輔、初登校の晩。

紗弥加と加奈は佑輔の親父に呼ばれ、小明家の玄関に来た。

「おじさん、お話って何ですか？」

「佑輔が何か嫌味でも言ってたんですか？」

佑輔の親父は少し苦笑いし、「言ってるじゃないよ。佑輔は二人の事、大好きだから」と言って、話を始めた。照れて頬を紅くする二人の少女の前で。

「真剣に聞いてくれ」

「分かりました」

二人は声を揃えて答える。

「ウチにはお母さんがいないだろ？ どうしてだと思っ？」

「確か…… 佑くんを産んだ時に死んでしまったと…… それだけしか」

「そう。確かにそうなんだ。俺の嫁、ほしかわさつき星河臯月さんは、佑輔を出産した時に死亡した。でも、本当はもう、死ぬ事は分かっていたんだ。伝染病、というのだろうか、詳細がまだ分からない星河家代々続い

てしまっている病気があったそうだと。それは、昔、戦争中の爆風の煙や配られた食料に入っていたらしい菌の影響らしい。佑輔を出産する時は、まだ、治療法も見つかってなくて、星河の血を持つ皐月さんは、若くして死ぬ事が分かっていた。でも、皐月さんは最後に『子供を残したいの。私の生きていた証拠に。その子には辛い想いをさせてしまいかもしれないけど、その時は、貴方が助けてあげて私のようにしないであげて、お願い』と俺に言った」

二人は沈黙。

「それから、出産は成功したけど、皐月さんの体力が持たないで皐月さんは死んでしまった。俺は泣いたよ。そりゃ、もう、目が痛くなるほどにね。でも、目の前の赤ちゃんを見たら、皐月さんが本当に言いたかった事が分かった気がした。『私の想いと一緒に幸せにして』ってね。それから、俺はなるべく自然で空気が綺麗な所で暮らす事にした、そう、ここ天川村だ。佑輔は元気に育ったよ。同じ村に住んでいた二人の少女とね。本当に病気の事なんて忘れさせるほど元気に遊んでいたよ」

「……………」

二人の沈黙に、涙が目元に微かに混ざる。

「そして、佑輔と少女が5歳になった時、東京の大型病院で働く友人から『もしかしたら、治せるかもしれない』という連絡が入った。佑輔と皐月さんを幸せにする為に、俺は仕事を幾つも掛け持ちして佑輔の治療代にあてる事にして、東京に引っ越した。二人の少女と佑輔を離れ離れにしてまで。それから、佑輔には『定期健診っていうのがあるから、週1回は検査に行くよ』と言って病院で毎週検査を受けさせた。それから、10年。とうとう、治せる手段は見つからなくて、俺は最後の幸せに、と天川村に帰る事にした。佑輔の為に、二人の少女の為に」

……………

「だから、二人には佑輔を最後に幸せに見送ってほしい」

「……………」

「本当ですか？」

「ああ。残念だけど、本当なんだよ……」

「嘘！嘘ですよ？嘘って言ってくださいよ！」

「本当なんだ……だから、それまで今まで通り接してくれればいいよ」

「分かりました……」

「俺は今でも治療の方法を探している。だから、家を留守にする事は多いと思う。だから、お願いな。佑輔を」

玄関近くの木の陰に、天宮観月の姿を残して、話は終わった。

入院生活を始めて、半年。

佑輔は起きる事が珍しいような状況にまでなった。

そんな、ある晴れた日。

「……………よお、加奈、紗弥加、おはよう」

「佑くん……………」

「佑輔……………」

その日、俺は目を覚ました。何かに呼ばれるように、突然と。

時刻はもう夕方か、その頃だった。

もう、すっかり痩せて、見るのも苦しい姿。歩く事さえも、当たり前のように出来ない体力の低下。言葉も多くを発する事は出来ない醜さ。俺は泣き出しそうだった。それでも、涙さえ、俺を裏切つて出てきやしないし、いる気配も感じられない。

「加奈、紗弥加、俺を連れて行ってくれないか？」

「……………うん」

俺からの願い。

医者の上承も易々頂いた。きっと、もう、諦めているのだろう。

俺は、親父の車に乗って、加奈と紗弥加とビルの上へ行った。

階段は自分で上がった。フラフラして辿り着けるような足でもないけど、本能のままに、想いのままに、足を運んだ。

そして、その『約束の景色』まで辿り着いた。

「俺から、願いがあるんだ」

「うん……」

二人はもう察しているのだろう。俺の願いを。

「やろう、三人で……天体観測」

その、足元に広がる落書きと三人の名前は消える事はないだろう。俺が居なくなっても、ずっと、消える事はないだろう。ずっと、ずっと……

「……佑くん！」

「佑輔！ 嫌だよ！ 起きて、起きてよ！」

supernova 最後に輝く、最高の星の光。

病室の引き出しの中。

一枚の手紙。

「加奈、紗弥加へ。俺はもうそこには居ないと思う。会えないのがこんなに悲しいとは思わなかった。一人で居る長い闇の中が、こんなに寂しいとは思わなかった。こんなにも、二人に支えられて、二人のお蔭で生きていたなんて、今になってみないと分からなかった。二人に返事を返すよ、いつか貰った手紙の返事を。俺は、二人のどちらとも付き合えない。そこに居ないからでもある。でも、二人と

も好きで、大好きで選ぶ事なんて出来ないんだ。俺は、紗弥加が好きだ。俺は、加奈が好きだ。それは、前にいた友人にも似ているかもしれない。でも、あいつに負けなくらい、俺は、二人が好きだ。最後の願いをどうか、叶えて欲しい。俺が、最後に二人に叶えて欲しい事……………」

星河家の血は止まった。

「紗弥加、早く早く！」

「うん！ ちよつと待って……………よしっ！」

「じゃあ、電気消すよ」

「うん！」

部屋に浮かぶ、幾千もの星。不器用に大きさも疎らな星空。そこに、前とは違う一つの大きな星がある。カシオペヤやオリオン座と並んで、一番に輝きを放っている一つだけの星。

その星には、ある人の名前がついている。

不器用に作られた小さなプラネタリウム。新たに彫られた輝く穴。その光を見失わないように、二人は必死に追いかけた。記憶を無くさないように、想いを無くさないように、今日という日を共に探しているように。

部屋に広がる星空の中、最後の願いが、確かに輝く。

『生きていた証拠』 『確かに側に居た証拠』 『二人を想う証拠』

見失う事は無い。星空がなくても、その星は、二人の中で輝いている。

生きている、生きていた証拠。二人はいつも探している。流れて

いく、流星のような日々の中で、その想いを分け合った約束の景色を残して。

「さあ、そろそろ始めよう」

一人の想い人が教えてくれた、約束の証拠。天体観測。

九等星 星空のプラネタリウム（後書き）

今まで読んでくださり、ありがとうございました。この作品は、生きていく事、想いについて書きました。あの有名な曲からヒントを得て、自分なりの想いで、小説を作成してみました。本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4678d/>

天体観測

2010年10月8日15時27分発行